



## (2) 特に印象的だった遊びの事例に関すること

### 【3歳児 森の滑り台】

数人で急斜面を登り、そこから滑ることを楽しんだ日が何日か続いていた。その日も「滑り台したい!」という声上がり、10人くらいの人数で急斜面の近くまで来ていた。

「滑り台しよう」と張り切っていた子どもも、暗がりに入っ少し緊張気味に子どもも、急斜面を目の前にすると口数が減り、黙々と登り始めた。この急斜面は子どもたちにとって、足腰だけではなく手も使わないと登ることが難しい。子どもたちは目の斜面に一生懸命に、真剣な表情で足をかけ、手を使い、全身登っている。

一部の子どもたちはすぐに登り切って、私と一緒にしゃがみ込んでまだ登れていない子どもたちを見つめる。自然と「がんばー!」と大声で言ったり、「ここ!ここにつかまって!」と木を差し出したり、つかまったらいい場所を教えたりする姿がある。手助けしようと手を差し伸べた子が登れていない子に引っ張られて、ずるずると落ちてしまう。だからといって相手を責めたり怒ったりすることはない。また、もう一度前を向いて登ってくる。

私はその姿を見守りながら、子どもたちが上がってくるのを待つ。私が手を引っ張ったり、手助けしたりしなくても、子どもたち同士で助け合ったり、自分の力を発揮したりしながら登ることができた。登り切れた子は嬉しくて、私とハイタッチしたりハグをしたりして嬉しさを分かち合う。

みんなが登り切ると、A男が「滑り台しよ」と私に言う。それを聞いて、子どもたちも自然と滑り始める。急斜面だから、勢いよく滑ることができる。「きゃー!!」と歓声を上げて降りていた。5~6人程度で体をひっつけ合いながら、急斜面を降りる姿も見られる。どの子も嬉しそうに、満足そうに急斜面を滑って降りていった。



て  
け  
前  
で  
込  
れ



## (3) その他、自然体験活動の充実に向けて取り組んだこと

本園では、自然体験活動に関するワークショップや森を生かした保育を公開する幼児教育研究会を年3回開催しています。

### 1) 第1回 ワークショップ (7月3日)

『自然を使った保育の意味』



### 2) 研究大会 (10月30日)

『持続可能な社会の担い手となるために、その基盤となる態度や資質・能力を明らかにし、「自然とのつながり」と「人とのつながり」の直接体験を通してそれらを育成する幼児期の教育課程の開発』



### 3) 第2回 ワークショップ (12月20日)

『子どもが自ら育つ園庭開放～大人に必要な3つの安心感から～』



幼児教育に携わるたくさんの先生方にご参会いただき、幼児期における自然体験の重要性、森で行う保育のあり方を学んでいただきました。